

號壹第 卷貳第

「あみだに佛に染むる心の色に出で秋の梢の類ならまし」とは、聖法然上人の自から彌陀の靈光に感化して、是れは、秋の消滅の息を洩し給へる道詠である。頃日秋の未だる塵野に山に黄に、鐘樂なす光景を眺むるに就ても、聖人の道詠を憶はざるをえぬ。是れは、秋の興感と與ふ山野の紅色は、孔夫の天何と言ふことを四時行はれ百物生ずと曰ひし如く、彼らは天眞爛漫に愛も私なく、天の興へ玉ふ任に染なるとは、是れは、佛の心色を爲してある。大光の心なる如きは、我ら一切衆生の心盤を照し染なされんが爲に、清淨般若智慧不濁の光明を以て永しに照し玉ふも、我ら其靈光中に在り行ら、只世の五塵六欲に眼に染汚されて幾年月を経て、彌陀の靈光に淨化せらるゝ光景をなすこと能はれて、來る秋も來る秋も空しく過し、再び得難き今日を待たずして暮しゆくこと、實に彌陀に酬へざる處彼らは、年毎に有終の美を呈して天のミオヤの恩恵に報奉つるに、清き同胞衆よ、我らはいかにぞ受難き人身を受たる甲斐として、實に有終の美なる人生を尅果すべきや、自から反省して自己を照察し玉へ。而してまた我らは何にして大光の心なる報ふべきぞ。彌陀は靈光赫々として我らが心盤を照らし玉ふ。我らは聖名を稱えて聖旨の現はれを仰ぎ靈光に觸れて初めて靈に活きることを得ん。而しては、靈光の光榮を身に口に現すやうに爲て、ミオヤの聖龍に報ふるべきものと自ら信じて世の同胞衆に御す、ゆめす所以である。



南無の二義 (承前) 山崎 辨榮

我を救ひ給へこの要求はかやうである。我等は本如來よ、受けたる佛性を具へておると共に衆生の煩惱の皮殻を被つて居る。佛性は衆の卵のやうなものにて、自づと獨りて解化するものではない。生れたまふの我は煩惱の張本にて罪惡の源にて、諸の苦惱の我である。煩惱の我のみ勢力を持て居る故に常に罪を造り苦しむ。煩悩の我を永劫に安んずる事は出来ぬ。そこで今、佛の我を彌陀のミオヤの慈悲の中に投込て攝取の光明に同化せられんが爲に、南無彌陀佛と言ふの如くに

心をミオヤに歸し奉りて念々相續して至心不斷なる時は、唯は雞卵の解化し皮殻を開裂して雛子と爲る如くに佛の子と生れ更る。これが救はれた我である。救ひを得ざるは信心獲得と同心である。彌陀の慈光に融合して卵子が卵殻より出で、雛と爲る時は廣き天地の空氣を吸ひ明き光の中に出たる如く、已に信心開く時は得も云はれぬ靈感や有難さを感じらる。釋尊が六根常に清らかに光顔永しに麗しく在せしは、彌陀の光明中に心の心活をなされ給ふことの現はれなので、聖法然の如き、其他の彌陀の光明に解れて靈に生ける人は、本の生れたまふの我でなく彌陀の靈光に復活した我である。是を救はれた我と言ふ。佛や爲めに我を救ひ玉へ彌陀佛に要求するを救我と言ふ。眞宗の信者が已に信心得たる上は夜を晝に紹きて幾度となく我の救はれたる喜びて之を思ひ出しては有難うございませすナムアミダ佛と感謝す。幾度び感謝し

— (2) —

ても幾度び感謝しても盡く事なき有難さである。已に救はれた上は、三惡道に落ちるにきまつて居つたものが慈光の中に救はれたのであるから實に之を思ひ出して感謝の稱名を祭ることが出来る。此段になるに従來の淨土家の信者が現在では救はれる事は不可能である。今、死後ならでは救はれぬと言ふ流弊は、眞宗の現在より救済を蒙りて光明の中にいと幸福な感じの中に報恩の稱名唱ふ信者の方が幸福と云はざることを得ぬ。されば彼の門徒はア、幸福もよよ自ら感じて報恩の稱名を洩して居る。眞宗の念佛は救はれた上の仕合せを感じて稱名する身となりしは實に幸福である。然れども唯念佛を救の向上の大き菩提心の信力なきは大なる缺點である。信仰に依りて眞の幸福を得るは可なり、然れども積極的の宗教生活として人格の向上を求むるは信仰の眞價値なるものである。人生の眞意義は人生は最終至善の極所に向つて其光明中の向上の一路として意義ありまた

て最上至善の圓滿なる道德の究究せる佛の位なる彼岸に進んで行くことである。度我の念佛は如來よあなたに聖意を被りて恩恵の光に依りて、私の道德心を育て、圓滿なる人格即ち佛にして戴き度いこの希求を南無彌陀佛とす。眞宗では救はるゝ目的は只佛の中に無上の幸福を享受することである。それを得ざれば只感謝する外はない。此外に如來に對しても要求する所はないと云ふことである。如來を唯慈悲の深重な母親とのみ信じて居る。尙進んで如來は聖聖と正義とを有して居る大慈の父である。母として子に對する類望は我子はずべての善徳を授けて永遠の生命常樂の幸福を得させたいと言ふ所にある。父としての彌陀の我らすべての子に對して望む唯夫のみでは満足できない。父なる如來は我等を人格向上させて佛子の働き、世嗣の天職(菩薩)を志し、無上の願行を成就させて圓滿なる人格、善き人となしたいと言ふ望を以て子を育み玉ふ。但し世の親として我子に幸福な身、安心のできる身にしたいと言ふ望は勿論なれども更に進

價値あるのである。若し宗教を唯生の苦、死の怖を離れて永恆の常樂、即ち幸福を求むるのみならばいかに信仰を得て精神的に幸福を得たからとて身體生活の苦は免がれぬ。寧ろ疾く死して淨土に生れんには如何に左はなくては人生には積極的の意義あることは救度なる人生向上の大道に於て信知せらる。大乘佛敎の眞意を得ざる或念佛者の現在に於ては救はるゝ事不可能であるに偏する信者や又、眞宗の如き彌陀の光明に人生向上の無上の方あることを解せざる缺點ある救より進んで吾人はミオヤの眞意を信じて如來の念するものである。我を度したまへ(我を佛の子として圓滿なる人即ち佛として下され) 既に救はれた我は心盤が生れ更た精神生命となる。然る後は我を度し給へこの大菩提心を發せる佛子である。佛子は上はミオヤの圓滿なる理想として向上を旨とすべき意志でなくてはならぬ。度は梵語の波羅蜜の事にて到彼處にて現在此岸の我より人格が向上し

んで人格を高等にしてすべての人に愛敬せらるゝやうに尊き人格にいたしたいといふ望を持つて居る。されば往生論に曰く、若し人但極樂の受樂無間なるを聞て樂を貪むるが爲に往生を願ふは不可である。抑々往生を願はんものは願はく佛に成りたいこの心を發すべきである。其の佛に成りたいと言ふは佛に成らねば一切衆生を度す事ができぬ。衆生を度したき故に我佛に成りたい。而して一切衆生と共に普遍的に安樂を得たい。即ち一切と共に永恆の安樂を得たい。是が願住生の善提心である。之が如來の聖意に合ふことである。聖聖が釋し玉て居る。我を度し玉へと私を向上させて戴き度いこの望は余く慈父の聖旨に對する子等の志願である。諸の菩薩は沙羅密萬行を以て益々向上して一切の善を修して無上の佛果を期す。願はくば我如來の御子として諸佛の如くに圓滿なる人格佛になりたいこの最上高尚なる最上遠大なる希望は彌陀佛を言ふ最上極致の至善の都に在りますミオヤの御許に到達すべき心意である。然るに聖道家の

— (4) —

— (3) —

菩薩六度萬行はミオヤを離れ自ら之を遂行せんと欲するが故に甚だ難事である。今念佛の度我の波羅密は大慈父の恩寵の光を被りて向上するが故に手易である。

私共にミオヤの光明の道德的靈化的の御育を被むる次第は例を以て言はゞ天と月と日との關係の如くである。月自身には元なき物である。日光の反映即ち天に照る月光と爲つておる。月が初め三日の新月より十四日に至る迄に漸次に月の光に盈てゆく。我を度し玉へとの念佛は、私共の菩提心の月が彌陀の日光加はる毎に一夜々々に光を増すべく道德の向上を期することである。次第に光が加はりて十四日夜に至ることを菩薩の満位とし既に十五の満年と爲りしは之を菩薩の地を超て佛位に到つたのである。

人生の最終希望
人世最終の希望は我を度し玉へと言ふ念佛に依りて満足することを得。念佛は人生の生命である。無畏無怖と爲るはミオヤの賜である。また念佛は人生向上の大

に依て正覺を成せりと經に示されておる。
彌陀の無量無邊の光明また清淨歡喜智慧不斷等の光明は遍く法界を遍照して在ますば一切衆生の心靈を開發して圓滿なる人格即ち成佛せんが爲の大光明である。また一面吾人一切衆生には元より法身佛より受たる佛性を具有す。之を靈性とも言ふ。此佛性が即ち吾人の佛となり得らる。性能である。法身より受けたる吾人の佛性は必ず親身の光明に攝取せらるゝにあらざれば靈化して佛となる事が出来ぬ。吾人が人生の最終目的はミオヤより賦與せられたる靈性を發揮して圓滿なる靈格即ち佛と爲つて始めて完成したのである。

此目的を達せんには宇宙の大法なる一切衆生の心靈を攝取し靈化し玉ふ彌陀の光明を仰がざるべからず彌陀の光明は一切衆生的心灵を靈化し給ふ不可思議の靈徳を具備し玉ふ。其の如來の神聖と正義と恩寵との光明を以て我ら子弟等の心を道德的に向上させて下さる。我等が御育てを被むる萬徳の中に於て三四の

光明である。靈の生命の源泉である。若し彌陀の光明に指導され靈化された人は必ず無上佛位に到ること必し。人生の最終目的は那邊に在るぞとなれば二方面より人生の歸趣する真理を信知することを得。一方は宇宙の大法に隨順して最終に至善の極に到達す。一方は自己の心の奥底に潜伏する靈性を開發して圓滿なる人格を實成す。人は宇宙の大法を離れて活きることは出来ぬ。また宇宙の根元に還ることもできぬ。故に宇宙の大法に則らなくては至善の極に到ることもできぬ。また一方の自己の奥底に伏在せる本能性に具有せるものを發揮することは不可能である。寶石の素材でなきものをいかに琢磨すとも光輝を發するものでない。阿彌陀佛は宇宙の大法より一切衆生を最終の至善なる無上佛位に攝取して圓滿なる佛と爲さしめん爲の大光明者である。若し彌陀の光明を離れて一切衆生の成佛すると言ふ理あるべからず。太陽の光を離れて此肉體の生活し能はざると同じことである。されば過去一切諸佛もまた現在の菩薩も悉く念彌陀三昧

徳目を擧げて述べるならば一心に念佛して彌陀の慈悲心に同化する時は他人に對して親切の心と爲り、悲しみ憐れめる人には同情心に富みて他人の苦みが我が苦の如くに感せられ之を安からしむるやうにする。他人の喜びをば我が喜びと感じらるゝは之を布施波羅密と言ふ初めには人間心ばかりが働きて佛子の心は現れて來ぬけれども此處が我を度し給へるの念佛なりと思ふて如來の加被を仰ぐ時は道德心が力を増すやうになる。すべてに渡つて波羅密とは向上進歩することである。正義波羅密は戒徳とも言ふ。如來神聖の光明に照らされて自己を反省する時は自らの邪や悪きことは全く聖旨に契はざるが故に矯正して正直な善き心になりたいとの向上心が増進するやうになる。人生は全く圓滿なる人格に向上すべき修業の道場と信する時は縱令他人より罵詈雑言を浴びるゝとも是ミオヤより我が鏡鏡を鍛錬して菩薩の名刀と爲さんがための御方便と思へば何なることも安忍せらる。經に菩薩に當の師はない。若し己が缺點を指摘し非難を加へ己が短所を能く見

— (6) —

出して訪る人こそは我を矯正し玉ふ恩師とせよとの御聖訓厭げなく感じらる。また經に縱令惡人の爲に骨々相挫かれ節々支解されても甘露を飲む如くに忍べよと教へ玉ふ。

初めにはなかく忍び難き事をも少々に進むべく御育を被むるのうちに安じて忍ばるゝやうになる。人生はミオヤより受けたる鏡鏡の心性を報身の光明を被りて鍛錬すべき修業の爲に遣はされしものと思へば益々勇猛に進みて何なる難事にも勇氣を鼓舞して當ることを得るのである。また各自の職業はミオヤよりの使命なりと信じて業の貴賤に拘はらず念佛の光明中に勤勉努力する時はいかなる業務も波羅密なりと自覺せらる。

一心不亂に念佛し如來神聖の光明に琢磨せらるゝ時は金剛石の如き珍瓏たる人格の光彩を放射するに至らん。また一心に念佛して一心の明鏡を研磨する時は如來神聖正義の光が自己の意志に反映して尊と人たるの光を放さん。

である。(終)

神聖 (爲照見の智慧)

山崎 辨榮

神聖は善き道徳の光にてたれ人にて律さぬはなし神聖は神の智慧にて上もなき倫理照します光なりけり神聖は誠の道を照しますミオヤの智慧の光なりけり天地の内と外とに照りとふる人の誠の心なりけり神聖の聖旨の光明らけり心の善惡を照しわくくなり神聖の聖旨を己が意とし屋漏に恥ぢぬ心もかな神聖の鏡は明く人の知見を照ししますなり只己が知見のいかと神聖の鏡に向ひ照り返し見よ神聖は健すまじと大ミオヤの真理の道的光なりせば大明に私照のなきは大ミオヤの神聖にます道の光ぞ

正義

(邪惡を捨て正義に就し)

正義とは公正無私の大ミオヤの聖旨に契ふ行為也けり邪を捨て正しきに就く意こそ即ち神の正義なりけり

若し念佛は只救我の一面にして眞の幸福を得るのみを以て目的とする時は此の娑婆即ち忍土に處して空しく生活の苦を受けるよりは疾く淨土に往きて法性の常樂を受くるに如かじ。其反面なる度我の念佛即ち人生を光明中に向上の行路として始めて此忍土の精神生活の眞意發見することを得。衆生が向上して成佛を期せん此世界には寒熱の氣候、水火風雨等の災禍ありまた人爲的にも惡人の爲めに逼害せらるゝの難あり従る處に於て修業せば吾人無始以來備つきたる佛性の名刀を磨くに、荒砥を以て荒削を去ること遠て疾き如くである。されば經に此土の一日一夜の精進修行は彼の淨土に於て百歳するよりは勝れたり。若し此土は吾人が佛性を鍛錬すべき修行の道場なりと信する時は吾人の心靈を琢磨し鍛錬するの道具能く備はれり。度我の念佛、我を今の不完全より完全に趣かしめ玉へ。現在の未成品より佛子の品性を成就せしめ玉へ。我が此土に遣はされし使命を果させ給へとの度我の志願を成就せんには此忍土生活の價値あるを覺らるゝの

神聖の己がはからひ打捨てし聖意に順かへよし神聖の聖旨にかなひ行爲は千萬人も恐ることなし正義には神の聖旨の加はれば孰も懼る色なかりけり邪惡を捨て、正善を探り取り國を建てます彌陀の本願正義とは己がはからひ捨おきて、聖意にまかす也けり邪と惡はすべて己に有るものぞ聖旨は正義と善のみなり大聖旨に指導れつゝ、行爲は至善の國に向上みゆく也大ミオヤと共に行衛は過たす必ず聖き御國也けり身と口と意の業が聖旨より行ふこそ正義とはいふ邪と惡は聞き戒めやみれば正義の光に消さるはなし正義なる聖旨に背く行爲は必ずつひに亡びゆくなり神聖の靈性受けし人生を私に爲す罪ぞおそろし神聖の分れの靈性具しなから捨置くばかり罪なるはなし人生は聖旨に受し職責を盡す義務あるものごしらすや大ミオヤの命の義務果さすば人ご生れし甲斐やなからん

— (7) —

聖徳太子の傳

大ミオヤ命に生きし我身は知らざる人を迷はしむ
 罪己がはからひにして生れしにあらざるものご自覺せ
 よかし
 大ミオヤの聖旨に背く心より作す業にこそ名づけし
 ものぞ
 大ミオヤの聖旨にそむく外にまた罪と咎とはあらざる
 神聖の分けの靈性なかりせば世に罪惡の責はなからん
 大ミオヤの靈しき性を受ながら現はざるを罪咎と云
 ふ
 人の性本来惡にあるならば罪の責任とはあらましも
 ぞ
 大ミオヤはすべてを同じ子にあれば公平無私に照しま
 すなり
 大ミオヤの公平無私の聖旨をばねどすること正義な
 りけり
 神聖と正義は父の聖旨にて恩寵は母のこころなりけり

を率ひて油邊の皇宮を圍んだ。逆は之を知つて三諸の
 山に隠れたが夜夜海に出で、また皇后の居られる後宮
 に隠れた。その事を皇子に告るものがあつたので守屋
 に命じて逆を殺さしめ自ら後宮へ行かうとしたれど馬
 子の大臣が來つて諒めてゐる間に守屋ははや逆を殺し
 て來た。馬子は歎じて天下久しからずして亂れんと言
 ひたるに守屋は汝遠小臣の知る所でないと言た。かく
 兩家の諍ひは愈々劇しきを加へるに至つた。
 太子十六歳の四月御父用明天皇警余の河上に行へる
 新嘗から病を得て還らせられ痘瘡を御患なされた。太
 子は日夜看護せられた。袈裟をかけ香爐を擧げて祈
 禱なされた。帝は群臣に勅して、朕は三寶に歸して病
 を祈らんと思ふ、卿等宜しく之を護れと宣ふた。時に
 物部と中臣とは詔に順はず議するやう、國神に背きて
 他神に敬を致すは不可であるを突した馬子は之に反し
 て勸なれば謹しみて奉すべしと主張し、遂に豊國法師
 を引いて内裏に入れば太子は悦び大臣の手を握つて
 涙を垂れて語らるやう。佛教の妙理人また之を識ら

太子は、この時代に成長したまひ十四歳の時に敏達
 天皇崩御せらる。廣瀨の殯宮に於て馬子が太刀を佩き
 靈前に出で、諱詞を奉るを見て弓削の守屋は剛けり
 て靈箭の窟に中つたやうな姿であると言ふた。次に守
 屋が進んで拜せんとせしに手加がわなくと顔へたか
 ら馬子は之を見て、鈴を懸けたらよいと笑ふた。最も
 謹敬であるべき場所であらへんく皮肉を言ひ合ふは餘
 程仲のよくない事が判る。また皇嗣の選定に就ても皇
 后炊屋媛と馬子は、大兄皇子を立てやうとし、物部大
 連は穴穗部を立てやうとした、が竟に馬子の方が勝を
 占めて翌年大兄皇子が位にお即になつた。即ち用明帝
 である。穴穗部皇子は無法にも炊屋媛皇后を奸せんと
 自ら殯宮に入らうとしたが先帝の寵臣であつた三輪の
 逆は堅く宮門を鎖して七度門を叩けども入れなかつた
 穴穗部皇子大いに怒り諱詞を奉らんとするに、入れぬ
 は無禮である、宜しく逆を斬るべしとて守屋と共に兵

すして妄に異説を樹て邪見に陥へる中に大臣は心を願
 田に歸して法師を請ひて禱を祈らしむる事概喜に耐え
 ずと。大臣叩頭して曰く、幸に殿下の聖徳に賴り三寶
 を興隆することを得、死するも何ぞ悔いんと。此時も
 欽明の朝に同じやうな事であつたが蘇我家の勢力が
 前より加つてゐた爲で用明天皇も聖徳太子もこれが烟
 威であると同時に厚き信仰家であれば守屋も仕方がな
 かつた。かく太子と馬子とが悦んで語り合ふ姿を守屋
 が横目に睨んで大に怒つた。太子は左右に語り玉ふや
 う、大連は因果の理を識らず今に亡びんとて少し
 も自から知らぬとは憐れむ可ものであると。
 いよ、事は破裂して守屋は退いて己が阿部の宅に
 往き兵を集めて戦争の準備をする。中臣勝海も夫に興
 みして戦備に取りかゝらうとしたがこれは太子の舍人
 迹見の赤袴に殺されてしまつた。その間に天皇は終に
 崩御したまひ太子は悲哀の涙に沈み玉ひしも喪を秘す
 違さへもなく争亂は已に端を啓いた。守屋は穴穗部
 皇子を立て、天皇となさんとした。馬子は炊屋媛後の

詔を奉り佐伯連等をして穴穗部皇子を殺さしめた。太
 子は止めて之は天倫に背く、人の人たる道でない。殺
 さすとも罪あらば他國に還すがよいと諭されしも、大
 臣は應かす、大義親を遣すは斯る場合であるを辯解
 した。太子はア、大臣また因果の理を知らずと歎息せ
 られしと。七月朝議にて守屋征討のことに決し、馬子
 は諸皇子群臣と共に兵を率ひて對手に向ふて守屋の
 川の邸に迫つた。守屋はその子弟と共に手兵を率ひて
 稻城を築きて妨戦した。守屋自から極木に登り枝の間
 から矢を射ること雨の如くその軍なか、強弩なれば
 皇軍も恐怖して三度まで退却せり。其の時太子十六歳
 にて軍後に從ひ額に東髮して士卒を督し玉ひしが自ら
 思ひ玉ふやう、我軍或は敗れんとす、佛に祈るに非ず
 んば勝難からんと。乃ち秦の川勝に命じて白膠木を
 祈りて四天王の像を刻みこれを御頂きの境中に置き
 ひ給ふやう、今軍をして敵に勝たしめなば誰世四天王
 の爲に寺を建つべし、と祈りて大に兵を、め遂に迹見
 の赤袴をして守屋を射させるに其矢守屋の胸に中りて

き道を聞きなされた。其當時我國未だ文明に到らず
 漁獵を好み腥臭を嗅ひ鳥獸の糞などを好む。太子は殺
 生の罪重きを知らせてまた樂獵を行はせられた。それ
 は連立して野邊に出で良き樂草を多く取り得しものを
 勝として競ひ取り興味を感せしめるものである。兎く
 太子の仁慈の心は上下、般に及ぼしたが故に從來武骨
 一邊な殺伐の風も佛敎の感化にて相互に和らぎ合ひ、
 禮儀を重んじ平和を樂しむやうに爲つた。(終)

故淺井七人の一週忌に參じて

土屋 觀通

もとより實質の上に於て神(佛)の如何なるべきか
 を確めるのではないけれども、先哲の教へと私の要
 求との上に於て私の絕對満足を受けらるやうの程度
 と形式との上に於て如來の慈悲を信するに至る。孔子
 の天に於ける、キリストの神に於ける、釋迦の如來に
 於ける其の内容の一々に至つては多少その見解を異に

樹から落ち川勝は進んで其頭を斬り其子弟等皆誅せら
 れ大連の軍全く敗れて我に平和と爲つた。太子は豫て
 の誓の如くに攝津王造の岸上に四天王寺を建立なされ
 た。また敬田院、施藥院、悲田院、療病院を建つた。
 敬田院は衆生慈悲、敬田院は貧窮孤獨者を養ひ
 院とは男女無縁の病者を寄留せしめ病に隨つて藥を
 與て看護せしめた。施藥院は藥物を施し病癒を植
 るて藥を施しなされた。悲田院は貧窮孤獨者を養ひ
 なされた。また自ら養所し玉ひ、攝津河内の兩國に各
 各官稻三千束を出さしめて之を供給し玉ふた。實に大
 聖徳の深きこと見つべきである。
 天王寺は始め玉造の岸上に建て、次に荒陵の東に
 移す。此處は昔釋迦如來轉法輪の所とす。寶塔の金堂
 は極樂の東門の中心に當り塔の塔六毛と佛舍利六粒を
 加へ塔の心柱の中に籠め納れ、六道を利する相を表は
 せり。寶塔の第一の密盤に譬ひて手づから金を繰はめ
 遣法與滅の相を表せり。
 太子は慈悲深くしてまた國民にも慈悲の心を施すべ

り。其他宗教、哲學、科學、倫理道德、藝術等の諸問題などあげれば際限もなく横つてゐるのであります。而も然らざしてあるが如くならざらば一々點檢し來れば何れも大小單復、各その關係を有し又各々に相關連せざるはない。此の意味から言へば宗教の如きもその人生生活の一面に過ぎぬと言ふ事になるのであります。人生の目的、價値の生活、人格の完成など、私の要求の根本問題に考へ及ぶ時、價値の生命として現れるものは則ち宗教であります。宗教は私の脚題である。一切は之より發し之に歸る。即ち一切の私は此の思想中心の上に現はれたる如來中心の生活に始めて眞實無限の私の意義を發見するのであります。然し乍ら此の本尊は如何なる内容の本尊たるべきか天と言ひ、神と言ひ、佛と言ひ、佛といふもその本尊の内容に於て私の前途に大なる差違を生ずるのであります。何となれば本尊は即ち宗教に於ける一切の中心であつてそのもの、内容如何は直に之を信奉する、私の生活如何に根本的變化を來すからであります。もとより宇宙

に二の眞理はない、道は一なる可ものである。天地の大道、宇宙の理想は二つない。されば宇宙の本體、萬法の統攝たる本尊にして二つある可道理はない。從つて私の歸すべき唯一の如來は無畏大悲の體理者でなければならぬ。然らば是の如き本尊は私に向つて如何なる態度と御心を持つて授けられるであらうか此の點に至れば現存せる儒教の天、基督教の神、佛敎の如來、又佛敎の中にも此の如來の衆生に對する態度に於て宗教信仰の内容を異にしてゐるのであります。故に既成宗教に於てはかかる諸佛諸神の中何れの宗教に依るべきかは、やがて本尊の選擇となつて來るのであります。もとより在來の我國宗教の状態はかかる嚴密なる宗教思想の精練と本尊佛の選擇は充分に行はれずしてゐたやうであるが、基督教、儒教の二は別とすも獨り佛敎各宗成立の本尊に至つては未だ確立せぬものもあり、又確立したるもの、中にも各々その内容を異にするものがあるのであります。尙一般の人々の間

には何等夫等の考へもなく、所謂永き封建の遺風に慣れて目的習俗的世襲的無自覺の上に自分等の死骸埋葬の寺檀關係を以て直ちに自己の宗旨の如く考へてゐるものもあつて、寧ろ感然のきはみの人々もあります。甚しきに至つては上國務大臣より相當知識階級の人々すら一度此の宗教問題に至れば一向考へない人があり、或は反つて之を迷信視する人々もあるに至つては寧ろその愚や及ぶ可らずである。苟も人生の理想に生き、生存の價値に立たんとするものにしていかんか此の宗教を無視する事ができません。然らば私の今希念する本尊とは如何なる御方であるか、今現に私に希念せられつゝある、所謂私の心に響きつゝある事實上の本尊は如何なる御方であるかと言ふに、之は哲學的に又は宗教學的に論ずべきものでなくて、今現に私の全心の希念を事實上に受けさせられつゝある所の本尊でなくてはならない。もとより私の小さい心を以て其全分を了知する事は出來ないとしても、私の全心を要求する永遠の生命と無限の

向上とを常に開發的に與へ給ふ所の本尊でなくてはならぬ。而て自ら正しと思ふ眞の御方を言ふのであります。如何なる場合にも一切に超えたる神聖の御心と又如何なる場合にも眞理を離れ給はぬ正義の御心と如何なる場合にも絶対に救つて捨てさせ玉はぬ慈悲の御方であります。如來は一切萬法の最尊に主權にして又一切衆生の絕對のミオヤである。私共をして如來と等して理想に生きて宇宙の大道に立ち、權威と力と望みとを離れすべき絕對の規範となり玉ふ所の御方であります。一切の眞となり、善となり、美となるものは、いつも中心を此の如來より發し來るのであります。所謂一切至善の本體となり、一切行動の中心たり又生命たるの力となり玉ふ御方であります。此の意味に於て一切の凡ての宗教の本尊は皆此の如來の大悲が衆生救済の上に現はれ給ふたものを各自の心に相應する様な内容と形式とに當めて信じたまふに過ぎぬと信じられます。然し此の意味に於て私の希念し奉る如來は私の心の心の上にも明確に捕捉せられ玉ふこと

のできる如來であることを感謝せずにはゐられない。されば直にその全體が私の希念し奉る如來の全分ではないのであります。けれども私に現に希念せられ給ふ處の如來は夫より一層深く私の心の上に明確に意識せられ玉ふ事を信せずにはゐられません。そして私の心の上に映し給ひし如來はたゞ私の數の主として信せられ玉ふ御方であつて、初めの程は宇宙の太靈といふやうな漠然たる力と慈悲との御方であつたのが段々絕對的に、而も人格の本尊として在ります事が感せられ、昨今では法藏菩薩の因位本願の上に現成せられ玉ひし大悲の御親として拜せられるやうになりました。否實には法の阿彌佛も此の太靈であつたのであります。そして釋尊の如き正しく此の太靈の此士に應現しましたもので所謂應身佛とは此の釋尊の事であり、即ち本佛たる彌陀の大悲を示すと共に吾人の行くべき一切の具體的規範として示現された御方が釋尊であると信せられます。如來中心主義とは此の阿彌佛を中心とした釋尊の如き靈的御人となること

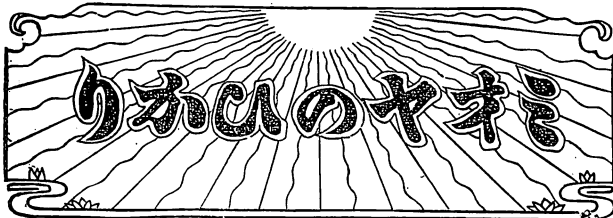
とであります。故に私は一面之を如來中心主義又は神人中心主義の大道とも言つてゐるのであります。四、佛子序だから尙一言申上げて置きたい事は佛子の自覺であります。牛の子が牛であり、馬の子が馬であり、犬の子が犬である如く、人の子が人であるならば如來より出たる我々は又如來であらねばならぬ。換言せば如來を御親といふならば我は如來の子である如くそれと同時に吾等は又等しく如來であらねばならぬ。而て一切の衆生悉く佛性を有すと自覺は直に又我は如來の一字即ち又如來なりとの本質的自覺は自から表現せられて來なければならぬのであります。此自覺こそ人生の第一義、而て此處に吾人は立處に佛子の自覺を以て佛たるべき絶大の希望と力と喜びとを感謝し來るものであります。ここに初めて吾人は如來を以て眞の御親なりと信じ又吾人は初めて無限の力と永遠の生命とを得るのであります。眞の自覺的向上も亦こゝより初めて起るのであります。

ミオヤのひかり

島野 禎 祥

私は孤獨な疑念に充つる青年でした。然してミオヤの光は私にすべての疑念を去らしみ善の時は歌意の聲を聞かざらざらした。ああ、私はミオヤの光に浴し生かされて生きて居ます。おほおやおのひかりはひろしうつせみの悲しき吾れに光りへり。おほおやおの光は尊しうつろなる吾れに與へし安信の道。もろてをばあげてさげばんおほおやおの光を浴しあふるる歡喜に。みづ〜しみおやおの光照るところなべて慈悲充つる林なるなり。牧々としてひねもす吾れはおのがし命かしこみみおやにぞ生くる。のみも照らすおやおの光はおほほしき吾れがゆく方にかう〜ご光り。かかしこみておやおやを朝にうなねつき夕べに祈る吾れはやすけし。切々に疑念の雲はかかるなりしかはあれどもおやおは光り。

大正九年十一月十五日印刷
編輯兼 發行所 岩品誠信
印刷人 秋邊熊太郎
發行所 光明會松戸教會所
千葉縣松戸市本町二丁目
振替東京四九三三八番



號貳第 卷貳第

大正九年十二月四日、嗚呼斯の日、我が大恩師父辨榮上人淨土に歸らせ給ふ。いまそかりし惡の音容再接し奉るに由し無し。悲惱何ぞ堪へん。然れども、思ひかへせば、上人懇切の極めたる平生の慈訓は、隨で之を思ふに「光明」遍く十方世界を照して念佛の衆生を攝取し給ふミオヤ在します。ミオヤは靈界の太陽なり。例へば太陽の光に由りて地上の生物が化育するが如くに、ミオヤの光明に觸るれば衆生の心意は靈化せらるるなり。されば至心にミオヤを信愛し靈國に生れんと欲して一心に念佛すべし。然る時は衆生の佛性の卵は如來の慈光に孵化せられて、生死の凡夫は現在よりして永生の佛子と更はり、闇黒より出て、光明の生活と成らん。至心に念佛して速かに靈界の太陽に在しますミオヤに遇ひ奉れ。至心に念佛して速かに斯のミオヤの光明に見みえよ」と曰ふに歸す。大恩教主世尊の遺勅にのたまはく、我が入涅槃の後諸の弟子展轉して我が遺法を行せば是れ即ち如來の法身常在に在しして滅せざるなりと。實に、たとへ常に恒に上人に遇ひ奉るを得とも、若し上人の教へ給ふ所を實行し獲得せずは是れ全く遇ひ奉らざるに等し。念佛せん哉、念佛せん哉、念佛理上人常に在しして滅し給はす。



安心問答

辨榮上人御遺稿

問 宗教に入つては先づ第一に安心を決定せよと承はりの全體安心とは云何のことなるか。
 答 安心とは、信仰の目的、主義行法とを確ききめてそれに心を安置して動かさぬことを云ふ。即ち信條が心にしかさまつたことである。
 問 信條とは何なるか。
 答 三條あり、一 所求、二 所歸、三 所行、これを決定するを安心と云ふ。
 問 所求とは何をか求むるべき所なるか。

問 宗教の信仰に、低級なものと高等なものと階級ありや。
 答 大に信仰の階級あり、從來機教相應と申すことあり、機とは人の智識の程度にて低級な人に教が餘り高くて手が届かぬ故に、其教法を手に入れて自分

問 信條とは何なる物に歸依信賴すべきか。
 答 自己最大の要求を容れて救ひ下さるの神尊を定むるので即ち全く自己の信賴する處の本尊を確かに定めて信することである。
 問 所行とは云何。
 答 自己を救ひ下さる神尊がいかにせば其聖旨に契つて救ひ下さるか其行方である。また救を受ける方法である。上の三條が確にきまつたのが安心のできた人云ふ。

— (2) —

問 宗教の階級とは云何。
 答 實には數多の階級あり今暫く三階に分ちて明せば一、自然教(現世教)二、超自然教(未來教)三、圓具教(光明主義)の三教である。
 問 初の自然教の安心はいかに。
 答 自然教は最も低級の信仰にて、其要求するところ現世の肉體の幸福を目的とし、例へば病氣平癒を祈り又は災難を免るゝ爲、或は延命を祈り、又五穀豊稔家内安全等の如き其しきは投機業の運を祈るような者さへある。夫らは幼稚な信心なので、未來の靈魂の幸福を求むるやうな遠大の希望はもたぬ。自然教は云何なる神を信するや。

問 第二の未來教(超自然教)の信條はいかに。
 答 未來教の信仰の目的は現世の幸福を祈る宗教よりは高等である。此の教では現世の幸福を求めず専ら後世の幸福を要求す謂く現世の運命は先生の宿因である。いかに佛の力にて宿業は轉することはできぬまた假の世の幸福は神の力を仰ぎてまで求むるは不當である。唯後生の極樂に生れて永劫の幸福をこそ求むべきであるとの教でこの要求が動機となるを未來主義と云ふ此教の目的とする處は現世では想像にも及ばぬ程高等の美天賦即ち極樂に生れて無上の幸福を享受することにあり。淨土宗眞宗の如きは此の宗教に屬してをる故に此の宗旨では現世神を大に排斥する。さて日本にて一般の民間に行はれておる信仰は上の二つである。然るに現代の有爲なる士女の要求する處はもつと高

問 自然教では云何なる行法を用て神を信するや。
 答 此信仰は現在の肉體の幸福を求むるのであるから矢張り肉體を苦しめざれば神は助けて下さらぬものと信じ行水、斷食、跣行等を爲し、又行者が説詞を捧げ咒文を誦し千卷經を讀み等の種々の行を以て神を祈禱する等の用法とす之を自然教の信條とす。
 問 自然教はいかに宣傳して行はるや。
 答 自然教は幼稚なる思想の人の弱點、病氣とか又種々の災難等に遇ふ時は或は行者の媒介を借り又は自ら神を祈等を以て信仰を爲す例へて土地に雜草は自然に繁殖する如くに行はる、高等なる宗教は土地に稻を作るに耕耘、培養を要する如くに宗教家がつとめて宣傳せざるさきは行はれぬ、自然教の現世神の肉體の幸福のみを求めて、人格の核なる心靈を

問 未來教は何なる行をつとむるや。
 答 未來教にて救ひを仰ぐ處の方法は必ずしも一定しておらぬ。若し二者を併てみれば眞宗の如きは衆生は罪惡深重にして必定地獄に墮する者なれ共阿彌陀如來はそれを救はんが爲に衆生に代りて苦難を受けて救ひの道を立て玉ひしことなれば、我らは只其御本願を信じて如來の眞を信じ得れば其時に救はれしなり。其しは只如來報恩の爲に念佛すべきものであり。我らが爲に佛が願も行も、悉く成就し玉ひしことなれば衆生には別に願も行も要らぬなりと教へ

— (4) —

— (3) —

てをる。
淨土宗にては彌陀の本願は稱我名號にて我名を稱へて我を念する者を助け玉ふと信じて専ら只佛名を念じて臨終の少まで相續すれで佛の來迎に預つて必ず往生を得るべし。

問 未來教は我日本に行はる内何の宗旨がそれなるか
答 淨土宗眞宗などがこれに屬してゐる。故に此宗では現世祿を大いに排斥する。

問 第二期の圓具數はいかに安心を立つべきや
答 圓具數は最も發達したる宗教にて佛教の中の大乘佛教中の最も進化したる、圓滿具徳の教である之を天台や華嚴にて圓教と名づけておる。然るに天台や華嚴はいかに其教理は立派でも聖道即ち哲學である、理論としては實に至れり盡せり。いかに究むても之を用ふることはできぬ、而して其最も理を盡し事を究めたる教理をして實際に人生を救度する處の宗教として何人でも攝取し救濟せらるゝものは即ち光明主義である。

問 何を心得。心は永遠の光明中に住しておるけれども身體は寒熱や飢渴の苦が免れぬ。これを有餘涅槃と名づくるのである。次に肉體の命終りて正しく永恒常樂の光明界の實現したる處を無餘涅槃と名づくるのである。夫と同じく光明生活にも、理想の光明境界と、實際の光明境界の二位ありて、正しく彌陀の光明を得て靈復活して、永恒の光明中に生活するものを、理想の光明生活と名づけ、而して命終りて正しく無量光明の功德莊嚴の實現したる處を實際の光明生活と名づく。

問 光明生活に多義を含むとはいかぬ。
答 光明生活の中に多義を含むけれども、二義を以て攝することを得、一に最幸福、二に最高徳である。

問 最幸福とはいかぬ。
答 極樂の梵語を、須摩提と云ひ譯して、極樂また最幸福の國とも云ふ、彌陀の光明中に安住するときは現在に於ては、精神的に最幸福を感じらるゝ。此肉體の命終れば實際に最幸福の涅槃常樂を感じらる。

問 光明主義の信條の中に信仰の要求する處はいかぬ
答 要求の中に多義を含んでおるけれども之を概括して光明生活と云ふ、即ち人の生れたまふ心の生活は動物性を目的として活んと欲してゐる、又人生の眞理を自覺せざるを暗黒生活と名づけ信仰に入て人生の眞意を自覺し永遠の生命として圓滿の極に向上せんと欲する目的の生活を光明生活と名づく、彌陀の光明を獲得して眞の信仰生活に入ることである。

問 極樂往生と光明生活とは同一なるか
答 極樂往生と光明生活とは能く其眞意を會得してみれば同一である。極樂は別名を無量光明土と云ふ即ち彌陀の光明の實現したる世界と云ふ意味である。光明生活に現在と未來との關係はいかに。

問 光明生活に二位あり、之を佛在世の修業者に二種の涅槃あり、一を有餘涅槃、一を無餘涅槃とす、前のは釋尊の教の下に能く修行して正に道を證得する時は肉體をもち乍ら神は涅槃常樂の中に安住する

問 いかなるを精神的に最幸福なるか。
答 人の世に在りて最幸福とは、身體が健全に財産も豊富に位置も高く、子女も饒りすべての生活を圓滿に完全に爲し得らるゝ者は幸福である。然れ共人の精神には貪欲の煩惱ありて、いかに物質上の満足を得ても精神に於て、全く不満を去り、不安を除きて眞實に満足と安穩と平和を以て精神生活を爲し得ることはいかにとおもふ。或意味に於ては眞の幸福は精神生活に在りて云ふも然らんとす。人は生れたまふの心には、不安と不潔との感じ免れぬ若し信仰の光明を得て精神復活して光明の生活に入るときは、精神的に満足を感じられ、眞の幸福を感じらる、即ち肉體をもち乍ら神は最幸福の極樂に極あそぶと感じらる。眞の精神上の幸福は他人よりは幾はれぬ、人一度彌陀の光明に生れ更るときは、自ら人生の眞意味もこの中に感じられ、人生の眞價值も此に至つて認むることになり、自から我何の幸福ぞ期

問 光明生活の中最高徳とはいかぬ。
答 人の信仰生活に入る目的は、一方には實に精神的に幸福を感ずるに在り、又一方には道德的に人格を圓滿に向上して至善に到達するを人生の目的とするにあり、之を光明生活の最高徳を目的とす云ふ。

問 言ひ換れば光明の中に如來の聖意に合ふ行為を務めて佛に成ることを目的とす。信仰の目的は一方には永恒常樂の幸福を得ると即ち極樂に生るゝこと一面は至善圓滿なる人、即ち佛になることである。

問 斯の教ではいかなる神尊に歸命信賴すべきや
答 現在未來に通じて絕對圓滿なる尊き神尊、阿彌陀尊を本尊として歸命信賴して、永遠の救度を仰ぐ。

問 阿彌陀尊とは、一切諸佛の中の一佛なるや
答 否しからず一切諸佛の本地本佛にして、諸佛に超て獨一の尊き神尊に在ります。經に、阿彌陀佛は最尊

問 光明中の生活に至ると繰返し思ふ毎に自己の靈福を悦びて餘りあるに至らん。即ち是れが精神の最幸福である。
問 光明生活の中最高徳とはいかぬ。
答 人の信仰生活に入る目的は、一方には實に精神的に幸福を感ずるに在り、又一方には道德的に人格を圓滿に向上して至善に到達するを人生の目的とするにあり、之を光明生活の最高徳を目的とす云ふ。

問 言ひ換れば光明の中に如來の聖意に合ふ行為を務めて佛に成ることを目的とす。信仰の目的は一方には永恒常樂の幸福を得ると即ち極樂に生るゝこと一面は至善圓滿なる人、即ち佛になることである。

問 斯の教ではいかなる神尊に歸命信賴すべきや
答 現在未來に通じて絕對圓滿なる尊き神尊、阿彌陀尊を本尊として歸命信賴して、永遠の救度を仰ぐ。

問 阿彌陀尊とは、一切諸佛の中の一佛なるや
答 否しからず一切諸佛の本地本佛にして、諸佛に超て獨一の尊き神尊に在ります。經に、阿彌陀佛は最尊

第一にして諸佛の光明能く及ばざる處なりと示され
問 其如來は何れの處に在り玉ふや
答 如來何の處にも在らざる處なし、經に彼佛の光明無量にして十方の國を照して障礙する所なし、故に阿彌陀と名づく、聖賢の識に「彌陀の身と心とは法界に遍く衆生心中に映現す」と。

問 いかに行めて救はるや
答 阿彌陀尊はミオヤである、我等は子である、ミオヤの如來は聖旨を現はして、至心に我をミオヤと信じ、愛して我光明に生れんと欲して我名を稱念せよ然る時は我光明中に生れんと、言換れば一心に念佛せよ彌陀は念する心に應現して救はるゝなり。

問 念佛に何の意義あるか
答 三の義あり。一、請求。二、感謝。三、讚嘆とである。

問 請求とは何の義ぞ
答 生れたまふの人は未だ如來を信せず、闇黒の生活をなしてをる、請求して「如來よ我は心闇く罪惡

一にして諸佛の光明能く及ばざる處なりと示され

其如來は何れの處に在り玉ふや

如來何の處にも在らざる處なし、經に彼佛の光明無量にして十方の國を照して障礙する所なし、故に阿彌陀と名づく、聖賢の識に「彌陀の身と心とは法界に遍く衆生心中に映現す」と。

の凡夫にて必定墮獄の徒なればあなたの慈光の中に我を救度し玉へ」と念することである。この請求に救我度我との二義あり（ミオヤの光十月十一日號に載せあり）二、感謝。已に救はれたる上には精神に無上の幸福を感じて必定墮獄の罪惡なる我が如來の光明中の生活として戴き現在より永遠の救ひを被りしは全く如來の恩寵なれば、其感謝が溢れて稱名の聲と洩れ出づるを感謝の稱名と云ふ。

問 感謝は只口に稱名するばかりなるが、自分の行為にも現はるべきものなるか
答 救を受けたる即ち光明に満されたる悦の溢れが感謝の聲に現はると共に、身の行為にも現はれざるを得ぬ。眞實に如來の慈悲に満する時に其慈悲に動かされて働くのは是れ感謝が身に現はれるのである。

問 讚嘆の稱名とは何なるや
答 讚嘆又喜慶とも云ふ、是如來無量不可思議の功德の光明を念する時は自から其絕對不可思議なる慈光に觸るれば只々感極まりてアアナムアミダ佛と喜

嘆するの外なきに至る。我等は如來慈悲の光明を離れて救はるゝことできぬ、慈光に觸れば何とも云はれぬ靈感が感じらる、此の靈感にうたれたる時はアアと自づと喜慶せざるを得ぬ、これを讚嘆の稱名と云ふ。

問 念佛三昧とは何んか
答 念佛三昧とは、南無阿彌陀佛と云ふ衆生の一心に自己の總てを如來の中に投歸する時、阿彌陀佛不可思議の光明を以て衆生の心に満たしむ、闇黒なる衆生の心は如來の中に入り、如來の心光は衆生の心中に入り來り闇黒と光明と合する時は闇黒は消えて明輝と爲る、念佛三昧は衆生心と佛心と一體となりて、衆生罪惡闇黒の心は如來無量功德の光明に靈化せらるゝことになる。光明生活の事に就ては他章にゆづる。

問 この信仰は新らしき宗教なるか
答 しからず、先に述べし如く大乘佛教中の圓教なので夫を何人にも實行せしむるやうに傳道するにある

の凡夫にて必定墮獄の徒なればあなたの慈光の中に我を救度し玉へ」と念することである。この請求に救我度我との二義あり（ミオヤの光十月十一日號に載せあり）二、感謝。已に救はれたる上には精神に無上の幸福を感じて必定墮獄の罪惡なる我が如來の光明中の生活として戴き現在より永遠の救ひを被りしは全く如來の恩寵なれば、其感謝が溢れて稱名の聲と洩れ出づるを感謝の稱名と云ふ。

問 感謝は只口に稱名するばかりなるが、自分の行為にも現はるべきものなるか
答 救を受けたる即ち光明に満されたる悦の溢れが感謝の聲に現はると共に、身の行為にも現はれざるを得ぬ。眞實に如來の慈悲に満する時に其慈悲に動かされて働くのは是れ感謝が身に現はれるのである。

問 讚嘆の稱名とは何なるや
答 讚嘆又喜慶とも云ふ、是如來無量不可思議の功德の光明を念する時は自から其絕對不可思議なる慈光に觸るれば只々感極まりてアアナムアミダ佛と喜

嘆するの外なきに至る。我等は如來慈悲の光明を離れて救はるゝことできぬ、慈光に觸れば何とも云はれぬ靈感が感じらる、此の靈感にうたれたる時はアアと自づと喜慶せざるを得ぬ、これを讚嘆の稱名と云ふ。

問 念佛三昧とは何んか
答 念佛三昧とは、南無阿彌陀佛と云ふ衆生の一心に自己の總てを如來の中に投歸する時、阿彌陀佛不可思議の光明を以て衆生の心に満たしむ、闇黒なる衆生の心は如來の中に入り、如來の心光は衆生の心中に入り來り闇黒と光明と合する時は闇黒は消えて明輝と爲る、念佛三昧は衆生心と佛心と一體となりて、衆生罪惡闇黒の心は如來無量功德の光明に靈化せらるゝことになる。光明生活の事に就ては他章にゆづる。

問 この信仰は新らしき宗教なるか
答 しからず、先に述べし如く大乘佛教中の圓教なので夫を何人にも實行せしむるやうに傳道するにある

敬神尊及び、聖善導尊者、法然尊者等の眞精神の信仰に外ならず、上來安心の要領をのべし此の眞理は實は理論にあらず實行にあり、宗教は人の生命を新らしく生れ更らしむる處に眞意あり。吾人は世の同胞衆に對して唯一の大ミオヤの光明を被りて新らしく生れ更らざることを欲して御勤め申す次第なれば、願くば眞面目に道を求むるご云ふよりは寧ろ熱誠に道を修して吾人の眞理なることを證知し玉はんことを希望するものである。

佛陀禪那辨榮上人於柏崎極樂寺御往生の事

大正九年十一月十五日——上人様が近來會ふ人毎に御勤めになつて居られた越後柏崎極樂寺五日間の念佛三昧會も愈明日からである。無量の思を胸に秘めて東京の中井氏と二人原さんの奥さんに案内せられて、北國の暗い夜の街を自ざす御寺へ着いたのはもう十時近

轉げ出さない様に注意を下さい」操り返し操り返し仰つて下さる此の御言葉が深く頭に残りした。夜も同じく念佛三昧の後三身の聖歌に就て八相應化の御話をして下さいました。御法話が終つて讃歌を歌ふ間上人様はあの廣い本堂で寒そうに衣の袖を合せながら、それでも嬉しそうに一同と共に歌つておいでになりました。(思ひ返せば之が上人様の道場での御法話の最後でありました) 十七日——未明起床、上人様は五時半頃御入場。途中一度休息。直ちに引續き晝食迄念佛三昧を續けました。晝食を上つてから上人様は何か御身體の具合が悪いとて御伏せりになりました。一同心配致しましたが上人様は長岡で流行感冒の豫防注射をやつたからその反應熱である、或時期を過ぎさへすればよいのだから別に心配する事はないと仰つておられました。一同その話にて不安の中にもさしたる事とも思はず念佛三昧を續けてその夜は伏りました。けれども思は御病室に通ひ日本堂での御話の時に何か寒そうにしておいでになつた事や、御言葉が常

くでありました。来てみると御別時の結果が道場で御念佛をしておられました。御念佛が済んで上人様は御尋ねると長岡へ御宿りて御遊行の四人は先刻御到着との事でありました。何かしら物足りない寂しい気持ちで其の夜は寝させて戴きました。十六日——皆さんが道場で御念佛をして御待ち下さる間に方丈様佐々木上人と三人で停車場へ御迎へに行く。それは朝の九時頃でありました。何時も上人様に御心配をのみ懸けてゐる不幸の弟子は何時に變らぬ御優しい尊顔を拜して、申上げる言葉は喉に支へま

「何時来たな」あの御慈悲に満ちた御顔を少し傾けて、上人様は優しく仰つて下さいました。凡眼には何時に變らぬ御壯健な御様子と拜せられましたに……

御法話があり、午後又一回御法話「親鸞の方でいらつと温めて解化してやらうと思つても、卯の方で轉げ出してしまつては何時迄たつても解り様がない。オヤ様が救つて下さるか下さらないそんな事は何も心配しなくともよい、只自分の心にも似ず早口であつた事などを思ひ合せて、御自分の御病氣を棄てて私共を御導き下さる御上人様の有難い御思召を勿體なく感じました。

十八日——合圍の鐘に上人様も一同と共に御起きになりましたが常も様の様にすぐ床を御離れにならずその日に限つて床の上に御坐りになつて何か大儀さうであります。隨行の佐々木上人が心配せられて是非そのまゝ床に御休み下さる様に御願してヤット休んで戴きました。一同却つてそれを有難く思ひ、上人様は御出ました下さらずとも少しも亂れる事なく一心に念佛三昧を勤められました。所が上人様の御熱は案外高く三十九度近くもあるとの事、一同大いに驚きましたがまだ反應熱と信じてそれ程にも心配致しませんでした。十九日——上人様の御熱はなか／＼おさまらず此の日は三十九度一分迄も并り單に注射の爲めばかりご思はれず、土地の籠島先生(醫師)もごうも診断に苦しむとの事、何ぞなく心配にはじめました。二十日——昨日の御容體に似ず今日は非常にお宜しく、御熱も三十七度五分迄降り御氣分が好いからとて

丁度結願の事でもあり、御別時の結果に御十念を授けて戴く事になりました。午前十一時頃一同次の室迄参りますと思ひもかけず上人様は御床の上に袈裟衣を召してチャンと坐つておられます。一同一目見てハッとしました。感激の内に御十念を受けて直ぐ立とうと事になつた。先づ最初私共で堪りませんでした。御身體に障らなければよいが心配で堪りませんでした。然し御説法が進むに連れ此の御熱のある苦しいなか、御身體のうちに、御自分の御苦しみは一切忘れてしまつて常もと變らぬ御氣色で御説法下さる有難さが染々と身に染みて、涙が止りませんでした。心の中は有難さと心配とで一杯になつてしまひ御言葉も耳に入りません。上人様が此の苦しみ、御出ましになる必

「何止めでなく流れます。これも何故、たゞ私共が迷つてゐるからであります。此の世に迷の衆生さへなくば何も此の苦しみの娑婆へ御出ましになる必要はないのであります。種々な思の中にやうやく御説

疑點から發泡を貼つて試験をする事になりました。然るに夕方近くなつて又々御熱が昇りはじめ昨日の如く三十九度三分にもなりました。一同再び愁眉をひそめ、それから成べく御面會を謝絶する事に致しました。その夜は終夜御苦しうでありました。曉方になつて少し御まごろみになつた切りで殆ど熱の爲めに御安眠が出来ない御様子でありました。此の日の事でありました。本山の加行僧の一人から上人様に蓮社號と譽號とを戴きたいとの手紙が参りました。その返書に代書の理由として上人様御病氣で御執筆不可能の爲めと書きますと、上人様はそんな事を言つてやつては心配をさせるから、一寸所用で忙がしい故代書するの御許を仰せられませんでした。何處迄御優しいのか上人様の御心は底が知れません。二十一日——何時も朝は少し御熱の御様子でありました。その日は御熱も三十八度六分位で止り少し安心を致しましたが上人様の御苦しみはなか／＼除れない様僅か一合宛の牛乳を少しづつ御残しになる有様であります。

法は終りました。一同泣き上げて来る涙を押えてすゝり泣きの聲と共に退出致しました。然し事はそれだけでは終りませんでした。午後になつて何ふと御容體が急に御悪いとの事、御熱は三十九度三分にも昇つてゐます。サアしまつたやつぱりさつきの御説法が悪かつたのだ。そう思ひましたがもう後の祭、私共は一種苦しい威儀に打たれました。御自分でそれ程でもないとお仰し下さいませ。今迄にまだ一度も三十八度の熱を御存じのない上人様が、而も六十二歳の御高齡で三十九度にも餘る大熱ではどれ程御苦しいか想像しても解ります。それでも夕方から餘程楽だご仰つて元氣よく御話などもせられ地方の信者の話、光明主義發展の模様などを聞かれ大變喜んでおいでになりました。此の日隨行の佐々木上人は御名代で金澤へ立られ、結果の人々も各々引取り寺も跡になりませんでした。

二十一日——朝は御熱も餘程御降りて三十七度五分でありました。一同喜んで居りました所へ長岡病院の若菜先生も見え、此の分ならば退々御治りであらうとの事でありました。然し反應熱としては餘りに長いので除病の併發を非常に恐れておられました。土地の

その夜もやはり御苦しんで御安眠が御出来にならぬ御様子でありました。二十三日——御自分では少し楽になつたと仰せられますが傍の見る眼はなか／＼御熱さうではありませんが上人様はその日迄御病氣が治り次第引續いて傳道にお出になるお積りで二十八日からの越前新保圓海寺の五重傳法、十二月六日よりの明石市濱光明寺の教區講習會の方はまだ斷らずにあつたのを、醫師その他の御方に依り終りに決心をせられ夫々御断りの手紙を御口授になりました。その時にはお熱が三十九度近くもあり、御苦しき氣息の中からお休みも仰せられませんでした。餘程御苦しうですがお止め申しても御開入のない事は解り切つて居りますから、却つて御心が済んでよろしくらうと涙を呑んで筆記を致しました。左にその御文を掲げます。一言一句と雖増減を致して居りません。謹んで申上候出納平常西に東に大法に奉仕し佛院の加被力によりて多くは毒もなく仕へ來りしに今京都より相州信州を経て越後の國に巡回傳道し豫定の前六個所無事に勤め終りの柏崎極樂寺五日別時三昧會の第三日目より大いに發熱致し候之宿業の所感止むを得ざるものか實は初めにはかりそめの事と

思ひ来りしに熱度益々多きを加へ三十八度より九度
の半乳と冷水を仰ぐのみ幸に熱減る信仰を以て加
減なされる龍島醫師なり又長岡の若菜氏兩氏ともに至
誠心を以て之が療養法を講じ居るも少しは前途に明
事能はず誠に藥障深重の然らしむる處唯唯如來の
大慈悲を仰ぐのみ

豫て當月廿八日より五重相傳會相助め候事に折角
の請に應じたりしも何とも懺悔の至りなれどもとて
も此の分には爾後の経過ももそれ迄には見込み
なからん故に折角の御思召しに對して申し譯なきこ
とに候へども若し折角の御儀に何方なりとも傳燈師
の見込有之候はゞそれへ御たのみ下され度若しそれ
ども辨養が餘命あつて再び皆さんの御好意に酬い
事を得るの期を御待ち下され候はゞ本年中には難し
く候はんも一月にてもそれ迄に回復相成候はゞ然
るべく、いづれも一つには如來の加被力を仰ぎ一つ
には皆さんの御好意に酬いまつらん事を仰ぐのみ
病症は始めには或はチブスの熱にあらざりしやと
の疑點もありしがその點は全くチブスにあらざる事

覺する事を得たるもこれまた一種の光明ならんこの
分にてはとも來月の六日頃迄には回復の見込みなく
發病後幸に當地に信者に龍島と云ふ先生あり長岡
に若菜氏あり兩醫もより熱誠なる信仰家今回特に
あつく治療の方を講じて呉られしも未だども來
月六日頃迄には回復の見込みあらじ何とも申譯無之
候へども今回は折角の御好意にむき申候事全く病
障のおかす所願はくは了察し給はん事を乞ふ若し御
人が皆さんの御希望にあふ人御見當り有之候はゞ御
聘請有之度若し横濱の笹本文學士にては如何に候や
これまた先方の都合は解りかね候へども或は代りに
應じなさるかとも存じ候山口縣の藤本浄上人が只
今祖山の加行に來てゐられ候へども之は加行の終り
が餘程おそく十二月の末に相成可ぞ存じ候へばども
も御聞ひかたね候と存じ候まことに懺悔の至りに候
へど斷りあひかへ申上候 和南
十一月二十三日 山崎 辨 茶

光明寺上人殿
餘程御疲れの御様子ではありましたが此御手紙の後
では度氣分が落着いたと見えてそれからは大變無口
におなりでありました。此日も御熱はやはり九度前後

に略決定いたし候後にしても非常の熱の爲めに病人
も弱り居り然しその大熱の中にもたゞより光明
赫耀として何時でも御助け下さるは獨りの如來まし
ますのみ
大正九年十一月二十三日 山崎 辨 茶

圓海寺上人殿
謹んで申上候先般祖山勢至堂に於て御地の教區講習
會講師の請に應じ候も誠に不徳の身を顧みず皆さ
ん諸の大徳衆ごにも佛祖の恩寵を報せながら為め勤
むべき事業の酬いられん事を喜びながら自ら喜んで
應じたりしも爾後京都より相州信州を経て越後の國
に至り豫定の箇所六箇所のうち四箇所は無事に巡回
し終に柏崎町極樂寺念佛三昧會の五日間のうち第三
日目より大分に發熱し自ら本堂に出る事能はざりし
然れども集り來りし同行衆の熱烈なる念佛は堂に響
きわたつて佛力の不可思議なるを顯現するの思あり
き唯喜び辨養病めども彌陀の光明全く時代を救ふの
靈力不可思議なる

さて愚弱發病前後の経過は三十八度より九度の間
を往復してやまず實は近頃覺えなき熱度にて候如斯
の人生に自己の身の上に病魔の伏在しありし事を自
で傍で拜しますと隨分御苦しそうで時々御呻きになる
事さへあるものであります、それでも上人様は御自分
では苦しいと云ふ事を仰いけません。時に誰かが御伺ひ
するごに僅に御苦しいなるばかりであります。(後で上
人様に伺ひますと、病氣の苦しみは苦しみとして如來
様の有難い御慈悲は如何なる場合に輝いてゐると仰
せられました)

夜は何時も御病勢が募り御苦しうであります、が曉
方から少しづつ御熱の御様子でウツラ／＼となさいま
す。

二十四日より一日迄、紙面の都合にて來月號に發表する事に致
します。その間、二十七、八、九日三日間非常に御苦しまつた
身も御熱も變になられた時に有難い數々の御説法を願ひました。
それ等は凡て來號に致し致します。

十二月二日——御熱は前日に引續き高く御息づかひ
も御苦しそうであります。然し御熱の色は非常におよ
ろしく凡眼にはそれ御熱が近づいてゐるものとは
思はれません。その夜も何時もの様に御病勢が募つて
參りまして丁度九時頃でした、看護婦が驚いて御息づ
かひが變だと言ひます。一同或は御病室に集り上人様
を取り圍み御念佛を稱えましたが上人様は案外御確か
で、やがて二十分も経つともうよいからあらちへ行つ

て驚る様に仰いました。其の後二日引續いて三日の
午前二時半頃と六時頃に又そうした事がありました。
その時には床の間に來迎佛を掛け又上人様三染筆にか
ゝる三昧佛の尊像を掛けまして御臨終の準備を致しま
した。

三日——それでもう到底御回復思つかなしと云ふの
で方々へ御危篤の電報を打ちました。その時はもう何
だかホッカリとしてしまつて悲しいのか悲しくないの
かハッキリ解らない様な心理状態でありました。

御容體が追つてゐると思ふご何となく氣が落着きま
せん。御熱も高く御息づかひも悪く醫師に伺ひますと
心臓の方も追々と御弱りの御様子、然し凡夫の目には
はまだよもやと思つて居りました。(後で承りますと上
人様が「アヌアヌ」を仰せられるのを大野連教尼
は確かに聞けたとの御話であります)

その夜八時頃になりまして誰が言ふとなく御臨終が
近づいたと云ふので一同又御病室に集りました。一同
住寺の御打ちになる龍金の音に連れて低音に長く念佛
を稱へて居りますと上人様は團圓が手を御出しにな
つて何か言ひたげに手眞似で柏子を御打ちになります
(其の時にはもう御熱の爲めに舌が痙つてしまつて御

今は御身體の疲れも御忘れの御様子。やがて御説法も
終りと覺し頃を見計つて九州の大谷仙界上人の入れ
られた鳴々の木魚の音につれて一同の稱へる念佛と共
に上人様は今迄開き切りしてゐられました御口をナ
ムアミダ佛ナムアミダ佛と御開閉になり暫く稱名を御
相續になりまして。丁度此の時危篤の電報に依つて馳
つけられた京東及高崎其の他の信者數名風を切つて
入來り、彌陀の靈光に輝く上人の魏々たる最後の御顔
を拜して感極つて涙も出ざるの態でありました。終に
午前六時を過ぎる五分、過去數十年の間幾萬の生靈を
救ひし玉口を永へに堅く々々閉ぢられました。一瞬時
御顔の筋少し動くよと見れば御顔色少し變り相好
更に一段の莊嚴を加へて後は只寂靜。

時はこれ大正九年十二月四日、舊曆元祖法然上人の
御命日。大法の傳道に寧日なく、十方に遊歩して衆生
濟度にいそしまれし佛陀禪那辨茶上人、今巡教の途次
忽然として無量壽國彌陀本覺の都に歸りたまふ。凡眼
の見る所聖業未だ半ならずとせども如來の大智又計る
可らず。只夫聖意を奉戴して念佛の弘通を期せんのみ
南無阿彌陀佛

言葉が殆ど解りませんでした。それで木魚を持つて參
りますとどうだか御背きになりました。木魚につれて
一同暫く稱名を續けて居りました時に上人様は急に虛
空に向つて幾度か禮拜をなさいました。そして三度左
の偈文を御稱えになりました。

彌陀身心遍法界 衆生念佛王還念
一心專念能所亡 果滿覺王獨了々
御聲も確かて御苦言ながら御符に居るものには
確かにそれと承る事が出来ました。それが終つて一同
に同聲に御十念を授けられまして、もう好いから彼方
へ行つて寝めと仰せられました。

その夜は三度御危篤と云ふので一同御室に集りまし
た。そして最後に——それは正に十二月四日の夜の引
明けんとする午前五時頃でありました。

四日——今度こそ御臨終の言葉に一同あはれ一世
の英傑、當代の名僧、極樂よりの迎への使者なる大善
智識の御最後を送り奉らんものと各地の信者法類弟
子等御室に集れば上人様は廻らぬ御舌に何事か長々と
御説法になりました。御眼は虚空を見つめて動かす
正に現に御前に在します御來迎の彌陀如來及聖衆見つ
めつゝの御説法と拜せられます。御顔色も常に異らず

大正九年十二月十五日印刷
編輯兼發行 岩品誠信
印刷人 秋場熊太郎
發行所 光明會松戸教會所

東京市京橋區本八丁一丁目十五番地
千原莊 東葛飾區松月町二丁目
振替東京四三三八番